



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 330号 2011.4.10 発行 社会政策研究所

河北春秋

河北新報 2011年4月10日

避難所の生活は誰にとってもつらく厳しい。障害のある人やその家族であれば、なおさらだろう。一般の避難所では施設が不十分だし、ほかの住民に迷惑を掛けているのではないかと、家族は肩身が狭い▼秋田市の障害者の親でつくる「そよ風の会」代表を務める田中陽子さん（60）は新聞で被災した障害者と家族の記事を読むたびに、いたたまれなくなる。とても人ごととは思えないからだ。▼会には自閉傾向の強い子を持つ親が多い。環境の違う避難所でストレスが余計に掛かり、情緒が不安定になりがちな息子や娘をつい想像してしまう。時に発作を起こすので家族の不安が目に見える▼田中さんは34歳の娘のことを考え、災害などに備え水や食料などを自宅に備蓄している。しかし、今回の大震災は想像をはるかに超えた。薬がこんなに不足するものなのか、と学ぶことは多い。▼会では、非常時でも障害者が安心して暮らせる地域づくりに向け、行政に働き掛けている。同時に仙台市のボランティア団体を通して、同じ境遇の人たちに段ボール箱4個分のおむつや下着、栄養剤などを送った▼「障害者の親は常にいっぱいいっぱい。でも、自分がそうなったらと考えると、支援しないわけにいかない」。これからも被災した仲間に「思い」を届けるつもりだ。

被災地派遣の介護職員、482人に- 前週比154人増・厚労省調査

キャリアブレイン 2011年4月8日

厚生労働省は4月8日、東日本大震災で被災した社会福祉施設などに派遣された介護職員の人数が、同日現在で前週比154人増の482人になったと発表した。

派遣先の内訳は、岩手県に142人（53人増）、宮城県に221人（75人増）、福島県に119人（26人増）だった。派遣は都道府県間の調整によるもので、派遣可能な介護職員などの人数は8180人（54人増）に上る。また、社会福祉施設などが受け入れた被災地の高齢者や障害者らは1470人（332人増、県内移動を含む）。内訳は岩手県から227人（114人増）、宮城県から952人（15人増）、福島県から291人（203人増）だった。

被災した岩手、宮城、福島の3県以外の地域にある社会福祉施設などでは、被災地の高齢者や障害者ら5万3192人（812人増）分の受け皿が整った。内訳は、高齢者関係施設3万6179人（622人増）、障害者関係施設8946人（190人増）、児童関係施設7148人（増減なし）、保護施設919人（同）。高齢者関係施設のうち、特別養護老人ホームは1万2251人（316人増）、老人保健施設は6003人（99人増）だった。

停電が復興途上の在宅医療を直撃

キャリアブレイン 2011年4月8日

4月7日深夜に発生した東日本大震災の余震は、津波と地震の被害から立ち直りつつあった東北地方の医療に、大きな混乱をもたらした。中でも、推計約400万戸（8日午後6時現在では約70万戸まで減少）が被害を受けた停電は、在宅医療の現場を直撃。山形県では、

酸素吸入器の停止による死者も出た。停電からは復旧しつつあるものの、気象庁は今後も規模の大きな余震が発生する可能性を指摘している。

今回の余震では、宮城県石巻市と山形県尾花沢市で合わせて4人が死亡したほか、東北地方だけで約140人が負傷した。



石巻赤十字病院に設置されたHOSステーション(4月8日、石巻市内)

特に余震に伴う停電は、通常の状態に戻り始めていた在宅医療に大きな影響を及ぼしている。山形県尾花沢市では、停電によって酸素吸入器が使えなくなった63歳の女性が死亡した。また、周辺地域が停電した坂総合病院(宮城県塩釜市)には、たんの吸引や人工呼吸などを自宅でやっている患者約10人が緊急入院。石巻赤十字病院(同県石巻市)も、在宅で酸素療法の機器を使用できなくなった患者を一時的に受け入れるため、酸素吸入できるスペース(HOTステーション)を化学療法センターの一角に再設置した。8日午後3時までには11人が利用したという。同病院では、近隣地域の電力が復旧するまで、HOTステーションを設置する方針だ。

■「震災1、2週間後に逆戻りしたよう」

停電は、災害拠点病院の診療体制にも影響を及ぼした。宮城県内では8日正午段階で、4つの災害拠点病院が停電した。停電の発生を受け、坂総合病院や石巻赤十字病院は、通常の状態に戻り始めていた外来診療の受け付けを薬の処方だけに制限した。坂総合病院の神倉功事務部長は「周辺地域の一部では、電気だけでなく水道も止まっていると聞いている。まるで震災発生1週間後か2週間後に逆戻りしたよう」と語った。

余震の発生を受け、8日朝まで担当する患者の安否確認に追われたという仙台市内の訪問看護ステーションの職員は、「1か月前の震災発生時にも同じように安否確認に奔走した。また余震があれば、同じことを繰り返すのか」と疲れ切った表情で話した。

障害児と高齢者が集う共生型施設「輪(わ)っふる」完成

十勝毎日新聞 2011年4月10日

【音更】NPO法人きらりスマイル音更の会(山家=やんべ=さゆり理事長)が音更町緑陽台南区24で建設を進めていた「輪(わ)っふる」が完成した。障害児(者)の日中一時支援と、元気な高齢者が集うサロンを組み合わせた共生型施設。このほど完成式と地域住民への説明会を同所で開き、新たな福祉拠点としてスタートを切った。



地域住民対象の説明会で集会所を案内する山家理事長(右)

同法人は2008年に設立され、事業所「ぼかぼかhaus」(町緑陽台南区)で障害児(者)を一時的に預かる日中一時支援事業を行っている。現在、町内の小学1年生から20歳までの26人が登録。専門資格を持った10人のスタッフがいる。

利用者の増加で事業所が手狭になったことと、町内会や老人クラブの活動が活発な緑陽台で、障害児(者)と地域の高齢者が互いに交流する場所をつくりたいと、国の交付金を活用し、隣接地に共生型施設を開設した。施設は木造2階建てで265平方メートル。1階は交流スペースの他、集会所やカウンターテーブル付きの喫茶室もある。2階で障害児(者)の一時支援、相談事業を行う。

完成式では、来賓の赤間義章副町長が「利用する一人ひとりに笑顔が広がる施設に」とあいさつ。設計、施工を担当したエクセルホーム(帯広)の鈴木好之社長に、同法人から感謝状が贈られた。

説明会には緑陽台南区町内会の住民約40人が参加。広々とした集会場、カフェスペー

スなどを見て回り、「これなら寄り合い場所に活用できそう」「散歩途中に一服できたら」などと話していた。

山家理事長は「新しい拠点で一人ひとりの障害特性に応じた支援をしていくとともに、地域で暮らす障害のある人への理解が広がれば。高齢者のパワーや趣味、特技を生かしてもらい、交流を深めていきたい」としている。

集会所は学校の長期休暇期間を除く平日に貸し出す。利用料は1時間50円。問い合わせは電話 0155-30-3235、または 0155-31-6677 へ。

障害者支援 工房でみそ造り

中国新聞 2011年4月9日

障害者の就労支援に取り組む福山市今津町のNPO法人「どりにむわあくす」が、みそとみそ風味クッキーの製造を始めた。日本財団などから助成を受け、3月末に自動発酵装置やオープンなどを備えた工房を同町に新設した。



工房は鉄筋平屋の延べ185平方メートル。福山、尾道の両市から20～70歳代の計25人が通う。みそを甘辛く炊いた「幸せみそ」（180グラム、400円）とみそクッキー2種類（各45グラム、100円）を製造する。みそは麦と大豆、こうじ菌で約45時間かけてこうじを作り、約1カ月間発酵させたものを使う。同法人で注文を受け付けている。

みそ造りは、近くの村上克登さん(79)が指導する。村上さんは、1965年ごろから約35年間、地元でみそ造りを続けた経験者。88年から、障害者支援にも携わってきた。村上さん(右)から手ほどきを受けながら、蒸した麦と大豆を混ぜ合わせる利用者

【滋賀】粘土をこね住民と交流 彦根の障害者施設で陶芸教室

中日新聞 2011年4月10日

障害者と一緒に作品づくりをする住民たち＝彦根市海瀬町で

彦根市海瀬町の障害者施設「かいぜ寮」で9日、住民を対象にした陶芸教室が初めて開かれた。

施設の登り窯が改修されたことを記念して、地元との交流を深めようと企画。日ごろから作品を制作している知的障害者らと住民の20人が参加した。

施設職員の手ほどきを受け、住民は粘土と格闘しながら、ろくろで器を作った。隣でエネルギッシュな作品を作る施設利用者の塚本清孝さん(48)に、同市後三条町の会社員立蔵博さん(35)は「迫力がある」と圧倒されていた。

23日には、窯への火入れが行われる。施設を運営する社会福祉法人「かすみ会」理事長の今井一夫さん(76)は「地域の中でこそ、障害者も人間らしい営みができる。火入れ式には、地域の方にもぜひ来てほしい」と話していた。火入れ式は午前10時から。

(森若奈)

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック

